

多賀城市文化財調査報告書第120集

多賀城市内の遺跡1

新田遺跡第90次・市川橋遺跡第79次
発掘調査報告書

平成27年3月

多賀城市教育委員会

多賀城市文化財調査報告書第120集

多賀城市内の遺跡1

新田遺跡第90次・市川橋遺跡第79次
発掘調査報告書

平成27年3月

多賀城市教育委員会

序 文

多賀城市内には特別史跡多賀城跡附寺跡や、多くの埋蔵文化財包蔵地があり、それらは市域の約4分の1にも及んでおります。これら貴重な「文化遺産」を後世に伝えていくことは我々の重要な責務であり、当教育委員会としても開発事業との円滑な調整を図りつつ、国民共有の歴史的財産である埋蔵文化財を適切に保護し、活用に努めているところです。

本書は、平成21・24年度に実施した市単独事業2件の発掘調査成果を取録したものです。このうち、新田字後地区で実施した新田遺跡第90次調査では、古墳時代中期の竪穴住居跡を発見しました。過去の調査成果とも合わせると、本地区周辺に当該期の集落が広がっていたことが明らかとなりました。

市内の広大な遺跡に比べ、今回調査した範囲はごくわずかですが、これらひとつひとつの成果を積み重ねていくことが、本市の具体的な歴史像の解明につながるものと確信しております。

最後になりましたが、発掘調査に際し、御理解と御協力をいただきました土地所有者の皆様をはじめ関係各位に対し、心より感謝申し上げます。

平成27年3月

多賀城市教育委員会
教育長 菊地 昭吾

例 言

- 1 本書は、平成21・24年度の市単独事業による発掘調査2件の成果をまとめたものである。
- 2 遺構の名称は、各遺跡とも第1次調査からの通し番号である。
- 3 測量法の改正により、平成14年4月1日から経緯度の基準は、日本測地系に代わり世界測地系に従うこととなったが、本書では過去の調査区との整合性を図るため、従来の国土座標「平面直角座標系X」を用いている。また、本書で報告している調査では、平成23年3月11日の東日本大震災以降に測量した座標を用いている。震災以前の調査成果に関しては、座標値を整合させるために、再測量の成果に基づき東に約3m、南に約1mの補正をかけている。
- 4 挿図中の高さは、標高値を示している。
- 5 土色は、『新版標準土色帖』（小山・竹原：1996）を参考にした。
- 6 執筆は、Ⅰ・Ⅱを武田健市、Ⅲを石川俊英が担当し、編集は武田が行った。資料整理及び図版作成は各執筆担当者が行い、遺物の写真撮影は城口貴彰が担当した。
- 7 調査に関する諸記録及び出土遺物は、すべて多賀城市教育委員会が保管している。

目 次

Ⅰ 遺跡の地理的・歴史的環境	1
Ⅱ 新田遺跡第90次調査	2
Ⅲ 市川橋遺跡第79次調査	6

調査要項

- | | | | |
|---------|-----------------|-----|--------------------------------|
| 1 調査主体 | 多賀城市教育委員会 | 教育長 | 菊地昭吾 |
| 2 調査担当 | 多賀城市埋蔵文化財調査センター | 所長 | 高倉 敏明(平成21年度)
鈴木 典男(平成24年度) |
| 3 調査担当者 | 多賀城市埋蔵文化財調査センター | 副主任 | 武田健市 |
| | | 研究員 | 石川俊英 |
| | | 調査員 | 四家礼乃 城口貴彰 |
| 4 整理従事者 | 佐々木清子 宮城ひとみ | | |

調査一覧

No	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査担当者
1	新田遺跡第90次	新田字後地内	平成24年9月23～25日	7㎡	武田 四家
2	市川橋遺跡第79次	市川字伏石地内	平成22年3月2～6日	114㎡	石川

凡 例

- 1 本書で使用した遺構の略称は、次のとおりである。

S I：竪穴住居跡 S D：溝跡 S K：土壇 S X：その他の遺構

- 2 奈良・平安時代の土器の分類記号は「市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅱ」（多賀城市教育委員会 2003）に従った。詳細は下記のとおりである。

(1) 土師器杯

A類：ロクロ調整を行わないもの

B類：ロクロ調整を行ったもの

BⅠ類：ロクロからの切り離し後、回転ヘラケズリされたもの

BⅡ類：ロクロからの切り離し後、手持ちヘラケズリされたもの

BⅢ類：ロクロからの切り離しがヘラ切りで、再調整されないもの

BⅣ類：ロクロからの切り離しが静止糸切りで、再調整されないもの

BⅤ類：ロクロからの切り離しが回転糸切りで、再調整されないもの

BⅠ・BⅡ類では、ロクロからの切り離しが識別できる資料があり、ヘラ切りによるものをa、静止糸切りによるものをb、回転糸切り（糸切り）によるものをcとして細分する。

(2) 土師器甕

A類：ロクロ調整を行わないもの

B類：ロクロ調整を行ったもの

(3) 須恵器杯

I類：ロクロからの切り離し後、回転ヘラケズリされたもの

Ⅱ類：ロクロからの切り離し後、手持ちヘラケズリされたもの

Ⅲ類：ロクロからの切り離しがヘラ切りで、再調整されないもの

Ⅳ類：ロクロからの切り離しが静止糸切りで、再調整されないもの

V類：ロクロからの切り離しが回転糸切りで、再調整されないもの

I・Ⅱ類では、ロクロからの切り離しが識別できる資料があり、ヘラ切りによるものをa、静止糸切りによるものをb、回転糸切り（糸切り）によるものをcとして細分する。

- 3 本文中の「灰白色火山灰」の年代については、伐採年代が907年とされた秋田県弘田柵跡外郭線C期存続中に降灰し、承平4年(934年)閏正月15日に焼失した陸奥国分寺七重塔の焼土層に覆われていることから、907～934年の間とする考えと、『扶桑略記』延喜15年(915年)7月13日条にある「出羽国言上雨灰高二寸諸郷桑枯損之由」の記事に結びつけ915年とする考えがある（町田洋「火山灰とテフラ」『日本第四紀地図』1987、阿子島功・壇原徹「東北地方、10C頃の降下火山灰について」『中山久夫教授退官記念地質学論文集』1991）。本書では、これらの研究成果を基に、灰白色火山灰を10世紀前葉に降下したものとす。

I 遺跡の地理的・歴史的環境

1 地理的環境

多賀城市は宮城県のはほぼ中央部に位置し、南西側で仙台市、北西側で利府町、北東側で塩釜市、南東側で七ヶ浜町と接している。

本市の地形についてみると、中央部を北西から南東方向に貫流する二級河川砂押川を境に、東側の丘陵部と西側の沖積地に二分される。丘陵部は、松島・塩釜方面から延びる標高40～70mの低丘陵であり、南西に向かって枝状に派生している。沖積地と接する付近では、谷状の地形を形成しており、緩やかではあるが起伏に富んだ様相をみせる。沖積地は、仙台平野の北東部に相当する。仙台市岩切方面から東に向



第1図 多賀城市の位置

かう県道泉・塩釜線沿いには、標高5～6mの微高地が延びており、その北側には低湿地が広がっている。一方、南側には大小の微高地や低湿地、旧河道などがあり、海岸に近い場所では浜堤列も確認できる。

市内には、40を超える遺跡が所在している。西側の沖積地から丘陵部の西端にかけては、新田・山王・市川橋・高崎・西沢遺跡など市内でも有数の規模をもつ遺跡が隣接して分布している。これらの遺跡で発見された遺構や遺物には、陸奥国府が置かれた多賀城や付属寺院である多賀城廃寺と密接に関わるものが多く認められ、この時期に限ってみれば一連の遺跡群と捉えることができる。一方、海岸線に近い南東部には、浜堤上に西側から八幡沖・東原・西原・元舟場遺跡があり、七ヶ浜町と接する浜堤から丘陵にかけて



第2図 調査区位置図

は大代貝塚や大代横穴墓群、柏木遺跡などが所在している。

以下、本書に収録した遺跡の概略について述べる。

新田遺跡は標高5～6mの微高地上に立地しており、東西約0.8km、南北約1.6kmの範囲に及んでいる。縄文時代から中世にかけての遺跡として知られているが、特に中世では大小の溝で区画された屋敷跡が多数発見されている。このうち、寿福寺地区では12世紀後半から16世紀にかけて連続して屋敷群が形成されていたことが明らかとなり、出土遺物から上級武士の屋敷と考えられている。また、近年では古墳時代前期の水田跡が各所で確認されており、当該時期の生産域が広範囲に及んでいたことが明らかとなっている。

市川橋遺跡は市中央部を北西から南東方向に貫流する砂押川東岸に形成された、標高2～3mの微高地上に位置している。北東側に接する低丘陵上には、奈良・平安時代を通して陸奥国府が置かれた特別史跡多賀城跡があり、これと密接に関係する古代の遺跡として知られている。遺跡内では、これまで多くの調査が実施され貴重な成果を得ているが、特に注目されるのが多賀城南面に施工された古代の方格地割りの発見である。これは、城外の二大幹線道路である南北大路と東西大路を基準とする南北・東西の道路によっておよそ1町四方に区画されたものであり、その範囲は西側に隣接する山王遺跡西半部にまで及んでいる。本遺跡南半部はこの幹線道路の交差点にあたり、周辺では規則的に配置された大規模な建物群や四面庇付建物が発見されるなど、城外でも最も重要な地区であると考えられる。

II 新田遺跡第90次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、新田字後地内における下水道污水管工事に伴うものである。平成24年7月、多賀城市長より当該区における下水道污水管工事計画と埋蔵文化財のかかりについての協議書が提出された。計画では、下水道本管及び北側宅地へ引き込む取付管の敷設工事を行う際に、現況から1.5～1.6mの深さで掘削工事を行うものであった。本地区周辺では、1.1mの深さで遺構検出面に達することを確認していたが、既存道路内の工事であり、掘削幅も1m以下と狭隘であることから、9月23日に工事立会で対処することとなった。

工事立会当日、施工業者から掘削中に多数の土器を発見した旨連絡を受け現地で状況を確認したところ、現況から1.3～1.4m下の炭化物層から古墳時代中期頃の土器が出土していた。工事を一時中断し、施工業者の協力を得ながら調査を進めた結果、本地区が堅穴住居跡の一部であることが明らかとなった。翌日より



第1図 調査区位置図

遺物の取上げ、平面・断面図の作成、写真撮影を行い、25日に本調査の一切を終了した。

2 調査成果

(1) 層序 (第2図)

今回の調査では、現在の表土以下3層の堆積を確認した。

I層：現道路直下の砂利層である。厚さは約40cmである。

II層：暗褐色砂質土であり、厚さは約50cmである。

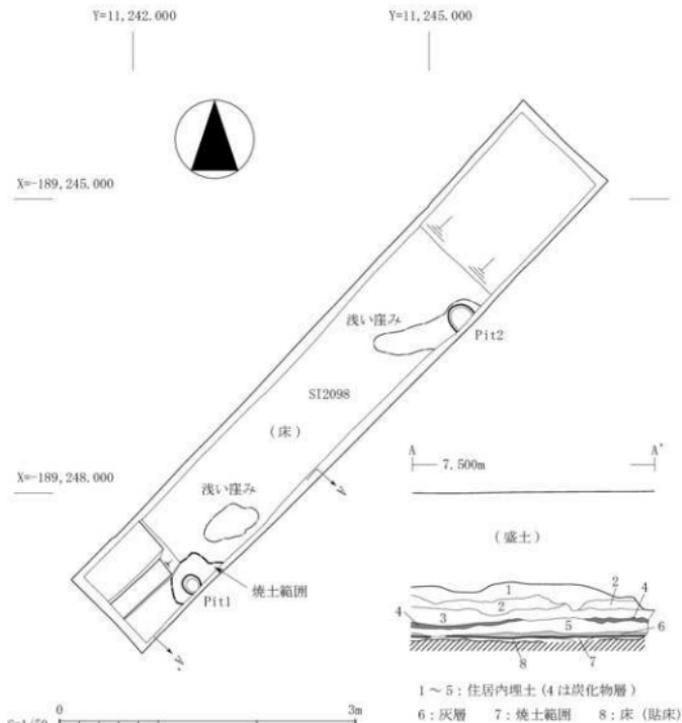
III層：にぶい黄褐色砂質土である。古墳時代中期の遺構検出面である。

(2) 発見遺構と遺物

S I 2098 竪穴住居跡 (第2図)

【位置・規模】 III層上面で発見した。調査区に限られていたため、規模や方向などは明らかでない。

【埋土】 7層に細分することができろ。1～3・5層が灰白色粘質土にぶい黄褐色砂質土が混在する人為

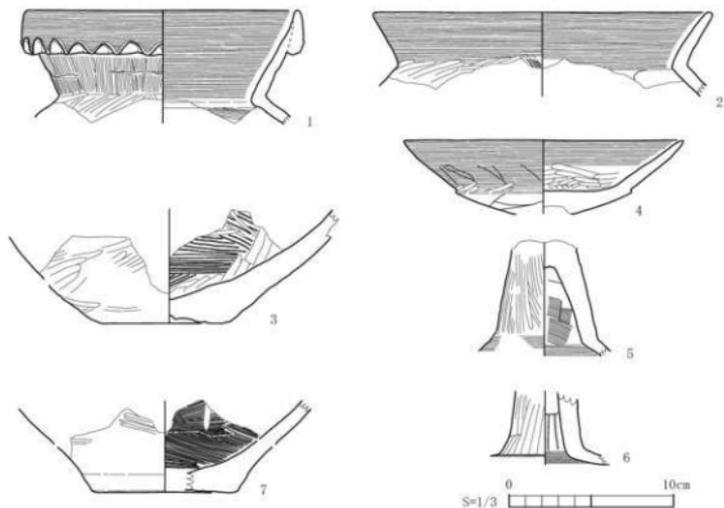


第2図 遺構配置図

的な埋土、4層は炭化物層、6層は固く締まった灰層である。厚さは1～3・5層が15cm前後、4・6層は4～8cmである。

【床面の状態】Ⅲ層上面に、黒褐色粘質土にぶい黄褐色砂質土が混在する土を貼り付け、この上面を床としている（註1）。貼床の厚さは約4cmである。本調査区内での凹凸及び南北の比高差はほとんどない。P i t 2基を確認したが、柱跡跡や抜取り穴は認められなかった。なお、P i t 1周辺には焼土が広がっていたことから、炉跡の存在も推測される

【遺物】4層からは土師器杯・高杯・甕、5層から土師器壺・甕が出土しており、いずれも非ロクロ調整のものである。



番号	種類	出土遺構	物 数		口縁 残存率	底縁 残存率	器高	写真 図数	登録 番号	備 考	
			外 面	内 面							
1	土師器 壺	5層	縁部部:ヨコナデ、腹部:ヘラナデ 体部:ヘラケズリ	口縁一部:ヨコナデ 体部:ヘラナデ	(16/4) 14/24	—	—	3	R1	塚原式	
2	土師器 甕	5層	口縁部:ヨコナデ 体部:ハケメ→ヘラミガキ	口縁部:ヨコナデ 体部:ヘラケズリ	(20/4) 5/24	—	—	—	R2	南小泉式	
3	土師器 甕	5層	体部:ヘラミガキ	体部:ハケメ→ヘラミガキ	—	80 24/24	—	—	R3	南小泉式	
4	土師器 高杯 (杯部)	4層	【杯上部】 上半:ヘラケズリ→ヨコナデ 下半:ヘラケズリ→ヨコナデ→ヘラミガキ 【杯下部】 ヘラケズリ	ヨコナデ→ヘラミガキ	(16/8) 8/24	—	—	—	1	R4	南小泉式
5	土師器 高杯 (脚部)	4層	脚部:ヘラミガキ、腹部:ヨコナデ	脚部:ヘラナデ、腹部:ヨコナデ	—	—	—	—	2	R5	南小泉式
6	土師器 高杯 (脚部)	4層	脚部:ヘラミガキ、腹部:ヨコナデ	体部:ヨコナデ	—	80 24/24	—	—	—	R6	南小泉式
7	土師器 甕	4層	体部:ヘラミガキ	体部:ハケメ→ヘラミガキ	—	87 24/24	—	—	—	R7	南小泉式

第3図 S I 2098出土遺物

（註1）住居内埋土4層については炭化物層であることから、直下の5層についても床面である可能性も考えたが、5層上面に凹凸が認められることや、5層埋土中から多くの遺物が出土することから、今回の調査では住居内埋土であると判断した。また、6層（灰層）についても、硬くしまっていることや、上面が平坦であることから床面の可能性もあるが、今回の範囲内では上面で住居に伴う施設を確認できなかったことから、埋土の一部と考えた。

3 まとめ

今回の調査は極めて狭い範囲に限られていたことから、発見したS I 2098 竪穴住居の全容を知ることはできなかった。

出土遺物についてみると、非ロクロ調整の土師器杯・高坏・甕・壺がある。このうち4層から出土した高坏脚部は中空のものであり、脚中央部がやや膨らみながら下方へ外傾し、裾部は脚部より強く外側に屈折し広がっていく。5層から出土した坏部は、体部外面下半に明瞭な稜を有し、外面の調整は稜上部がヘラケズリ後ヨコナデ、稜下部がヘラケズリである。一方、甕についてみると、4・5層出土のものは破片資料も含めいずれも器壁が厚く、体部外面の最終調整はヘラミガキが主体となっている。いずれも、南小泉式の範疇に含まれるものであるが、このうち4層出土の高坏坏部は5世紀でも古い段階とされている山王遺跡S X 230 遺物包含層出土の高坏I B類と器形的に近似する(註2)。このことから、S I 2098 は5世紀でも前半代に遡る可能性もある。

なお、5世紀頃の本地区周辺の様相をみると、西側に隣接する第73次調査で竪穴住居跡を3軒確認している。また、北側で実施した第9次調査では竪穴住居跡や土師器20点と石製模造品94点が集中する浅い窪み(S X 1103)を発見しており、特にS X 1103は祭祀に使用した道具を一括廃棄したものと推測されている。未だ点的な調査が多く不明な部分が多いものの、本地区周辺には5世紀頃の集落が広がっていることが推測されよう。

参考文献

- 仙台市教育委員会「鴻ノ巣遺跡―第7次調査報告書」仙台市文化財調査報告書第280集 2004
多賀城市史編纂委員会「多賀城市史 第4巻 考古資料」1991
宮城県教員会・建設省東北地方建設局「山王遺跡1」宮城県文化財調査報告書第161集 1994



1 土師器高坏(坏部) R 4



2 土師器高坏(脚部) R 5



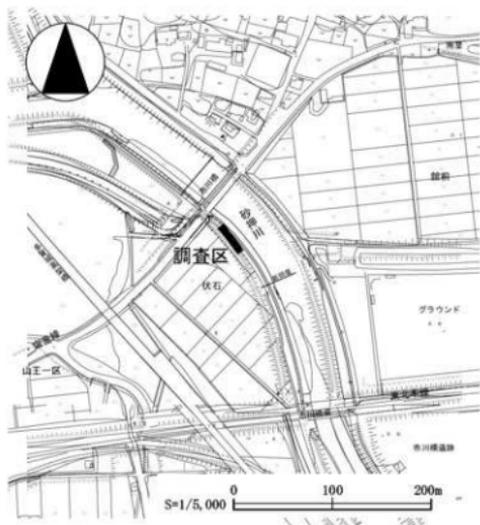
3 土師器壺 R 1

(註2) I B類の器面調整については、内外面ともヨコナデとヘラナデ、もしくはナデのものを主体とするが、ケズリのものもあるとしている(宮城県教員会・建設省東北地方建設局「山王遺跡1」宮城県文化財調査報告書第161集 1994)

Ⅲ 市川橋遺跡第79次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、市川字伏石地内の道路新設に伴うものである。平成21年12月9日に仙台東土木事務所より県道「泉・塩竈線」に係る護岸・敷き砂利・立入防止柵及び用地境界杭工事と埋蔵文化財との係りについて協議書が提出された。計画では、護岸工事は幅1.49m、長さ64mにわたり最も深いところで約2.1mの掘削を行うものであった。敷き砂利工事は、除草処理に係るもので、道路用地2車線部分に6mmの防草シート、及び10cmの厚さで約5,000㎡の範囲を対象とするものであった。立入防止柵及び用地境界杭工事は、前者は径9cmの丸太250本を2m間隔で深さ70cm、後者は一辺12cmのブロック50個を80cmまで打ち込むものであった。護岸工事以外は調査に係るものではな



第1図 調査区位置図

かったが、昭和30年代の河川改修では川底から、人面墨書土器を含む多量の古代の土器類が発見されており、埋蔵文化財への影響が懸念されたため工法変更の協議を行ったが、申請された方法以外では対応できないことから、記録保存のための発掘調査を行うこととなった。平成22年1月5日に土木事務所より発掘調査に関する依頼・承諾の提出を受け、3月2日より調査を開始した。

はじめに重機を使用して護岸部分を順次掘り下げた。掘削土は安全面を最優先し、全て調査区外に搬出した。掘削した堆積土からは遺物が出土したため、遺物の取り上げ掘削の行為を翌日も繰り返した。5・6日の2日間で、調査区の全景写真撮影等・平面図を作成して調査を終了した。

2 調査成果

(1) 発見遺構と遺物

今回の調査では河川跡1条を発見した。

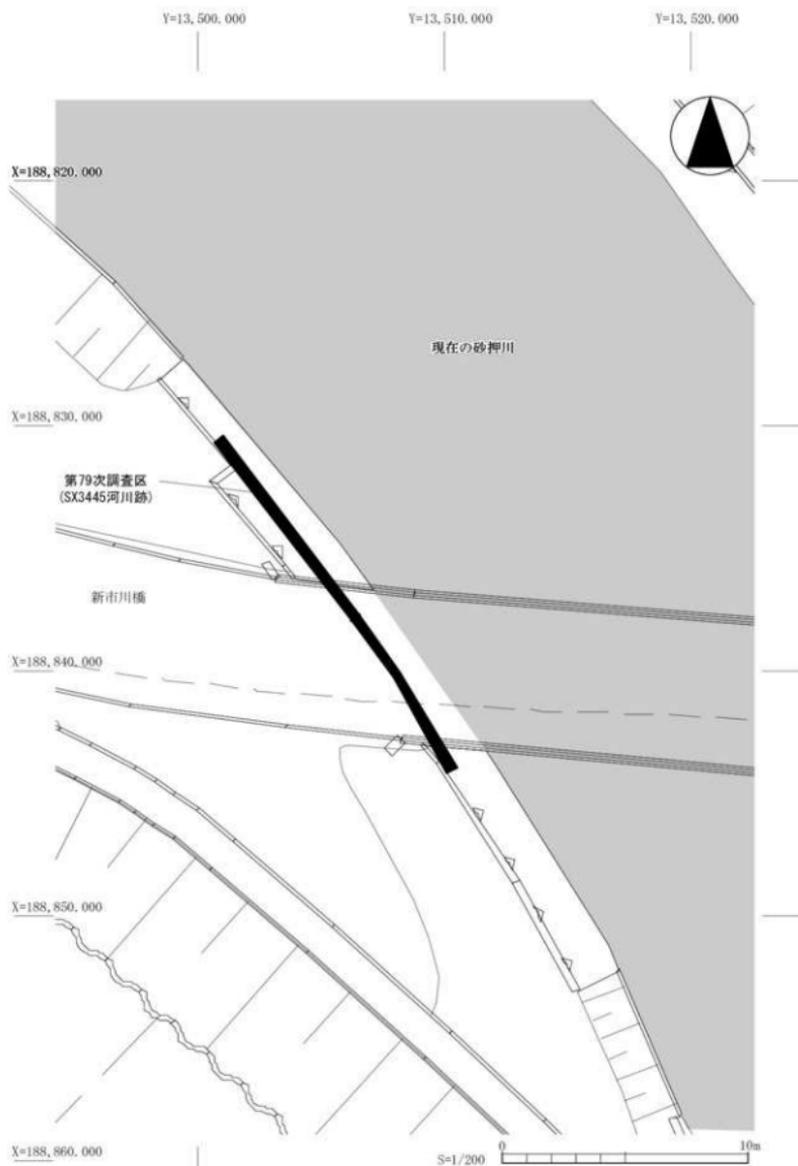
S X 3445河川跡(第2図)

【位置】 県道泉・塩竈線に架かる市川橋と新田環の間、砂押川の上流から見て右岸。

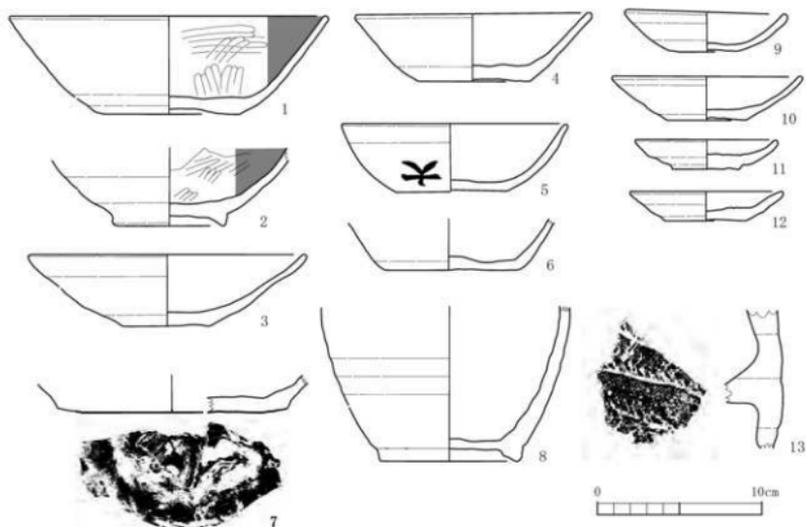
【方向】 砂押川の北西方向から南東方向。

【規模】 流路に沿って東西幅1.5m、南北の長さ64m、深さ最大2.1mまで掘り下げた。幅、長さ等、規模については確認できなかった。

【埋土】 8層確認した。1・2層はオリーブ黒色を呈した粘土層である。3・4層は砂を主体とした灰色土、

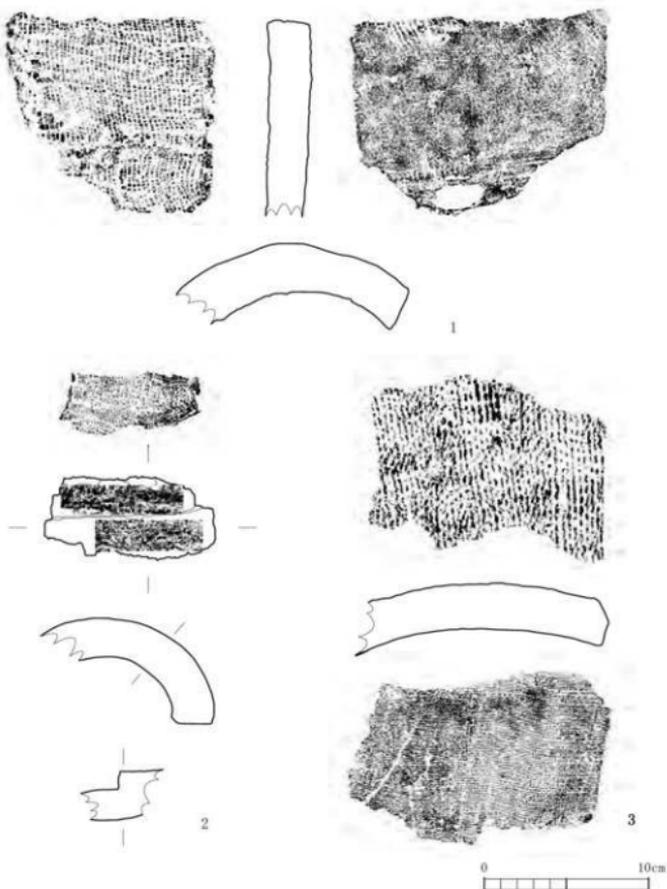


第2図 調査区配置図



番号	種類	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
		外 面	内 面						
1	土師器・坏	口縁部・体部：ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ ヘラミ芝キ・黒色地埋	(193) 2/24	8.3 24/24	6.0	34	R7	B V類
2	土師器 高台付坏	体部：ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ ヘラミ芝キ・黒色地埋	—	6.6 24/24	—	32	R3	
3	須恵器・坏	口縁部・体部：ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	(169) 6/24	5.2 24/24	4.4	33	R4	V類 底部に焼成後 二象の刻痕有り
4	須恵器・坏	口縁部・体部：ロクロナデ 底部：ヘラ切り⇨手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	(142) 22/24	6.25 24/24	4.1	34	R1	II類
5	須恵器・坏	口縁部・体部：ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	137 24/24	6.6 24/24	4.1	35a・ 3b	R18	体部に墨書 「大」V類
6	須恵器・坏	体部：ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	—	8.1 24/24	—		R20	II類
7	須恵器・甕	体部：平行タタキ 底部：平行タタキ	ヘラ状の工具痕	—	(140) 9/24	—		R19	
8	須恵器 甕	体部：ロクロナデ	ロクロナデ	—	8.4 24/24	—	36	R2	
9	須恵式土器 坏	口縁部・体部：ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	96 24/24	3.6 24/24	2.4	3・10	R10	
10	須恵式土器 坏	口縁部・体部：ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	115 24/24	4.7 24/24	2.7	38	R16	
11	須恵式土器 坏	口縁部・体部：ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	86 24/24	4.1 24/24	1.8	37	R11	
12	須恵式土器 坏	口縁部・体部：ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	93 24/24	4.9 24/24	1.8	39	R12	
13	不明土製品	体部：	ナデ	—	—	—		R8	

第3図 S X 3445 河川跡出土遺物(1)



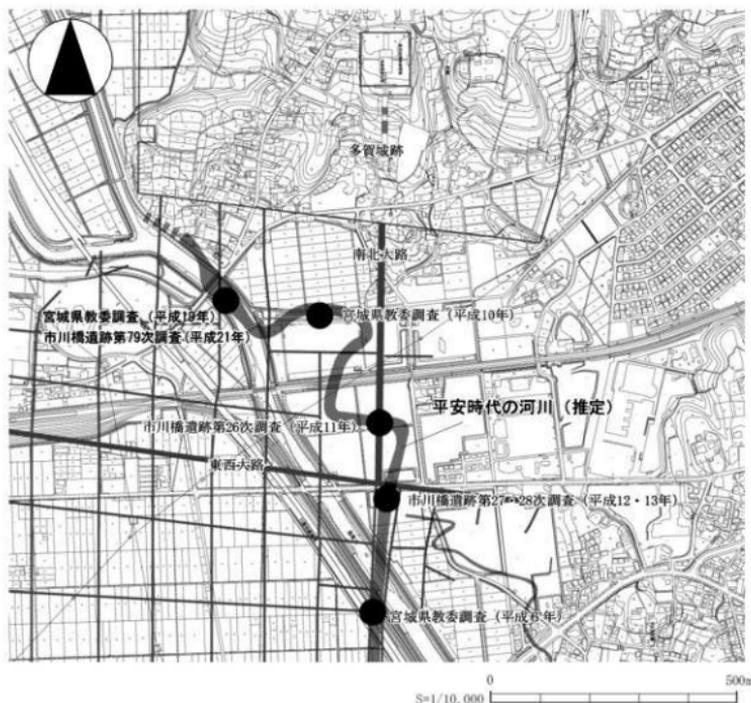
番号	種類	特徴		長さ (最大)	幅 (最大)	厚さ	写真 図版	登録 番号	備考
		凸面	凹面						
1	丸瓦	縦タテキ→ロクロナデ	布目	12	14.1	3		R13	II期
2	丸瓦	縦タテキ→ロクロナデ	布目	5.5	10.6	2.9		R17	II前期
3	平瓦	縦タテキ→遺丸	布目→ナデ	15	2.8			R15	II中期

第4図 S X 3445 河川跡出土遺物(2)

5層は粗い砂を含んだオリーブ黒色土、6層は粒子の細かい砂を含んだ灰色土、7層は粗い砂を含んだ黒色粘土、8層は黒色粘土である。遺物は5層から出土した。

【遺物】土師器坏(A類、B I・B II・B III・B V類第3図1)、土師器高台付坏(第3図2、土師器甕(B類)、須恵器坏(II類第3図4・III類第3図6・V類第3図3・5)、墨書土器(第3図5)須恵器甕・須恵器瓶(第3図8)、須恵系土器坏(第3図9～12)、灰釉陶器、不明土製品(第3図13)丸瓦(第4図1・2)・平瓦(第4図3)、自然遺物として骨等が出土した。

これらの遺物の出土地点は調査区南端部である。



第5図 平安時代のまち並みと河川跡(推定)

3 まとめ

砂押川の右岸を調査し、河川跡1条を発見した。その堆積土中からは、古墳時代後期～平安時代までの長期に渡る遺物(土器類・瓦・骨等)が出土した。砂押川では、昭和20～30年代に行った河川改修の際に、人面墨書土器をはじめ多量の土器が出土している。一方、本調査区周辺の調査成果を見ると、本市が平成11年度～13年度に実施した市川橋遺跡第26～28次調査や、宮城県教育委員会が実施した平成6・10・19年の調査において平安時代の旧河道を確認しており、第5図のような流路が推定されている。

本調査区の位置についても、平成19年に宮城県教育委員会が実施した調査区に隣接し、奈良・平安時代の遺物も出土していることから、それらの河川と同一のものと見られる。



調査区全景(北より)



調査区全景(北より)

写真図版 1



土層堆積状況(北東より)



土層堆積状況(東より)

写真図版2



1 土師器 坏 R-7
 3 須惠器 坏 R-4
 5 a 須惠器 坏 R-18
 5 b 墨書「大」
 7 須惠系土器 坏 R-11
 9 須惠系土器 坏 R-12

2 土師器 高台坏 R-3
 4 須惠器 坏 R-1
 6 須惠器 瓶 R-2
 8 須惠系土器 坏 R-16
 10 須惠系土器 坏 R-10

写真図版3

報告書抄録

ふりがな	たがじょうしないのいせき1							
書名	多賀城市内の遺跡1							
副書名	新田遺跡第90次・市川橋遺跡第79次発掘調査報告書							
シリーズ名	多賀城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第120集							
編著者名	武田健市 石川俊英							
編集機関	多賀城市埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒985-0873 宮城県多賀城市中央二丁目27-1 Tel: 022-368-0134							
発行年月日	西暦2015年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
新田遺跡 (第90次)	宮城県多賀城市 新田字後地内	042099	18008	38度 17分 52秒	140度 35分 4秒	20130923) 20130925	7㎡	下水道 污水管 敷設
市川橋遺跡 (第79次)	宮城県多賀城市 市川字伏石地内	042099	18012	38度 17分 54秒	140度 59分 15秒	20110302) 20110306	114㎡	護岸工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
新田遺跡 (第90次)	集落	古墳時代	竪穴住居跡	土師器				
市川橋遺跡 (第79次)	古代都市	古代	河川跡	土師器・須恵器				
要約	新田遺跡第90次調査では、古墳時代中期の竪穴住居跡を発見した。							
	市川橋遺跡第79次調査では、古代の河川跡を確認した。							

多賀城市文化財調査報告書第120集

多賀城市内の遺跡1

新田遺跡第90次・市川橋遺跡第79次
発掘調査報告書

平成27年3月31日発行

編集 多賀城市埋蔵文化財調査センター
多賀城市中央二丁目27番1号
電話(022)368-0134

発行 多賀城市教育委員会
多賀城市中央二丁目1番1号
電話(022)368-1141

印刷 今野印刷株式会社
仙台市若林区六丁の目西町2番10号
電話(022)288-6123

